

平成 24 年度  
広島市教育センター

# 小学校中学年国語科の文学的な文章における 「自分の考えの形成及び交流」の指導に関する研究 －交流の視点を明確にした指導を通して－

広島市立亀山小学校教諭

矢村 千尋

## 研究の要約

本研究は、小学校中学年国語科の文学的な文章における「自分の考えの形成及び交流」の力を伸ばすための交流の視点を明確にした指導の工夫を探ることを目的としたものである。指導の工夫として、交流の視点を具体化することと図を活用して視覚的に共通点と相違点を明確にすることとした。

交流の視点を具体化することで、教師も児童も何をどのように交流するのかが明確になった。また、図を活用し、視覚的に明確にすることで、全ての児童が、詳しく比較する姿が見られるようになった。つまり、交流の視点を明確にした指導の工夫が、感じ方の違いについて気付くことの力の向上につながると分かった。

キーワード：「自分の考えの形成及び交流」、交流の視点、図の活用

## I 問題の所在

平成20年に改訂された『小学校学習指導要領解説 国語編』に、「自分の考えの形成及び交流」という指導事項が新設された。

自身の教育実践を振り返ると、「自分の考えの形成及び交流」の指導では、お互いの考えを伝えるだけで、交流には至っていなかった。これは、指導事項の具体が明確ではなく、交流の内容や交流の姿を明確にもっていなかったからである。つまり、交流の視点があいまいで、指導者も子どもも何を視点に交流をすればよいのかが分かっていなかった。だから、指導事項を付けさせることが十分にできていなかった。

そこで、交流の視点を明確にした指導を行うことが、「自分の考えの形成及び交流」の力を伸ばすことにつながるのではないかと考え、本研究に取り組むことにした。

## II 研究の目的

文学的な文章における「自分の考えの形成及び交流」の力を伸ばすための指導の工夫を探る。

## III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎研究
- 2 実態調査
- 3 実践授業の計画と実施
- 4 実践授業の分析・考察

## IV 研究の内容

### 1 研究主題に関する基礎研究

#### (1) 文学的な文章における「自分の考えの形成及

### び交流」について

『小学校学習指導要領解説 国語編』の「C 読むこと」における「自分の考えの形成及び交流」の事項のうち、本研究に関わる指導内容

(低学年) 文章の内容と自分の経験とを結びつけて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。  
(中学年) 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。  
(高学年) 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

本研究では中学年オについて研究を行う。『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】』によると、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこととは、「物語を読んだ感想をどの叙述に基づいているか、自分の経験などとどう関連しているのかを明らかにしながら発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付いていること」<sup>1)</sup>と示してある。これを参考に見取りの観点を以下の3点とした。

- ① 自分の感じ方と友達の感じ方の表記上での違いについて比較している。
- ② 自分の感じ方と友達の感じ方を比較し、共通点や相違点について叙述に基づく理由を挙げながら交流している。
- ③ 自分の感じ方と友達の感じ方を比較し、共通点や相違点について自己の経験に基づく理由を挙げながら交流している。

#### (2) 文学的な文章における「自分の考えの形成及び交流」の力を付けるための指導の工夫について

##### ア 「言葉比べ」から「考え比べ」への段階的な指導

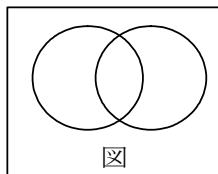
「言葉比べ」「考え比べ」という段階を設定し、「言葉比べ」から「考え比べ」への段階的な指導を行うことにする。

「言葉比べ」…表記上の共通点や相違点を見つける  
「考え比べ」…互いの考えの共通点や相違点を見つける

1) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成23年)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】』

## イ 図を活用した視覚化

黒上・小島・泰山らによると、考えを進める手続きやそれをイメージさせる図を「シンキングツール」としている。「シンキングツール」は、自分の頭の中にある思いや考えを視覚的に表してくれるものであり、「シンキングツール」の中でも、共通点や相違点を見つける比較の活動をするために有効な図が右の図である<sup>2)</sup>と述べている。そこで、本研究ではペア交流を設定し、考えを書いた付箋を用いて自分の考えと相手の考えの共通点や相違点を視覚的に明確にしていく活動を設定する。



## 2 実態調査

### (1) 対象

広島市立亀山小学校 第4学年1組 33名

### (2) 内容

見取りの観点に基づいて実態把握を行った。多くの児童が、書いたことを読んで自分の考えを伝えるだけにとどまっており、相手の発言内容について深く考えるには至っていない。記述した文章や発言内容から自分の考えとの共通点や相違点について比較していた児童は約半数であった。比較するという視点をもっていなかったり、比較していても、どこが同じなのかどこが違うのかについては明確に表出できなかつたりする児童が多かった。

## 3 実践授業の計画と実施

### (1) 対象

広島市立亀山小学校 第4学年1組 33名

### (2) 内容

#### ア 単元について

単元名：「家族やふるさとを思う心をえがいた本を読もう」

教材文：『世界一美しいぼくの村』（東京書籍）

指導事項：〔C 読むこと〕オ「自分の考えの形成及び交流」

文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。

言語活動：互いの考えを交流し合い、同じところとちがうところを見つけよう

### (3) 単元構成の工夫

#### ア 目指す児童の姿の具体化

指導事項に沿った単元の評価規準を設定した。

(図1)

評価規準	物語を読んだ感想を、どの叙述に基づいているか、自分の経験などどう関連しているのかを明らかにしながら発表し合い、 <u>一人一人の感じ方について違いのあることに気付いている。</u>
目指す児童の具体的な姿	物語を読んで、叙述に基づいた考えに自分の経験などを加えた考えをペア交流の際に発表し合っている。 また、 <u>図を使って自分の考えと人の考えの共通点や相違点を明確に表現している。</u>

図1 評価規準と目指す児童の具体的な姿

また、言語活動における児童の具体的な姿も想定した。(図2)

**想定した児童の考え**

児童1： 戦争はヤモの大事な家族や村をうばい、ヤモや村の人たちの心を傷つけたから、戦争はいけない。  
 児童2： あんずや、すももや、さくらんぼがたわわに実る美しい自然のある世界一美しいぼくの村で、ハルーン兄さんはいなかったけど、子羊も増えて幸せだったのに、そんな村が破壊されてかわいそう。

**想定した図を活用した交流**

**想定した児童1の交流後の考え**

私と児童2さんの同じところは、戦争は家族や村を奪うところなんです。違うところは、私は、心をきずつけたとか戦争がいけないと思って、児童2さんは村が破壊されたことがかわいそうと思ったところだと思います。

図2 想定した児童1と児童2の具体的な交流

2) 黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕 (2012) 『シンキングツール～考えることを教えたい～』

## イ 繰り返し学習

単元の中で、同じ形式の交流を繰り返し行うことで、交流の視点にもとづいた話し合いができるようにした。また、単元の二次では、「世界一美しいぼくの村」について、テーマを考えやすいものから抽象的なものへと難易度を上げ、三次では別の作品を読み、ペアを変えながら交流し、感じ方の違いに一層気付くことができるようにした。

(図3)

次	時	ねらい	学習活動	比べ方の段階
一	1	「世界一美しいぼくの村」を読んで学習の見通しをもつことができる。 初稿の感想を交流し、感じ方について比較をすることができる。	・ 感想交流の学習をしていくことを知る。 ・ 初稿の感想をペアで比較する。	
	2	図を用いた比較の仕方が分かる。	・ ペアで交流し、図を用いた比較の仕方を練習する。	
二	3	設定されている時や場所について交流し、内容の大体が分かる。	・ 話の時や場所について図を用いて確認する。	言葉比べ
	4	設定されている登場人物について交流し、内容の大体が分かる。	・ 話の登場人物について図を用いて確認する。	
	5	図を用いた比較の仕方が分かる。	・ ペアで交流し、図を用いた比較の仕方を練習する。	考え比べ
	6	最後の一文について考えを交流し、感じ方の違いに気付く。	・ 最後の一文について自分の考えと友だちの考えを図に基いて比較する。	
7	家族について考えを交流し、感じ方の違いに気付く。	・ 家族について自分の考えと友だちの考えを図に基いて比較する。		
8	ふるさとについて考えを交流し、感じ方の違いに気付く。	・ ふるさとについて自分の考えと友だちの考えを図に基いて比較する。		
三	9	別の作品を読んで家族について考えを交流し、感じ方の違いに気付く。	・ 家族について自分の考えと友だちの考えを図に基いて比較する。	
	10	家族について考えを交流し、感じ方の違いに気付く。	・ 家族について自分の考えと友だちの考えを図に基いて比較する。	
	11	自分の学習の振り返りをし、感じ方についての違いにどれくらい気付くことができるか理解することができる。	・ 最初の交流での感じ方と最後の交流での感じ方を比較する。	

図3 繰り返し学習を設定した単元計画

## (4) 指導の工夫

### ア 交流の視点の具体化

#### (7) 「言葉比べ」から「考え比べ」への段階的な指導

二次の前半に「世界一美しいぼくの村」のお話を読んだ「言葉比べ」を設定した。「言葉比べ」では、内容の大体をつかむために、お話の時や場所、登場人物について図を用いて交流を行った。この学習の後、「考え比べ」を設定した。ここでは、感じ方の違いに気付くために、三つのテーマで交流をした。三次は、別作品で「考え比べ」を設定した。

#### (イ) 質問の文例の提示

根拠とする場面や感想が共通しているのか相違しているのかを把握することを交流の視点とし、自分の考えとペアの児童の考えを比較させる。この視点に関わる考えで付箋に書かれていない考え

を聞き出すために質問をさせたい。ただ質問をするように言葉かけをしても、どのように質問すればよいのか分からない児童もいると予測するので、質問の文例を提示し、それを参考に交流をさせる。

#### (ウ) 例示

交流の視点にもとづいて質問ができるようにするために、文例を提示するだけでなく、一つの考え例を用いて、質問の練習を学級全体で行う場を設定する。このことで、実際にどのような考えにどのような質問をすればよいのかを具体的にイメージすることができるようにした。

## イ 図を活用した視覚化

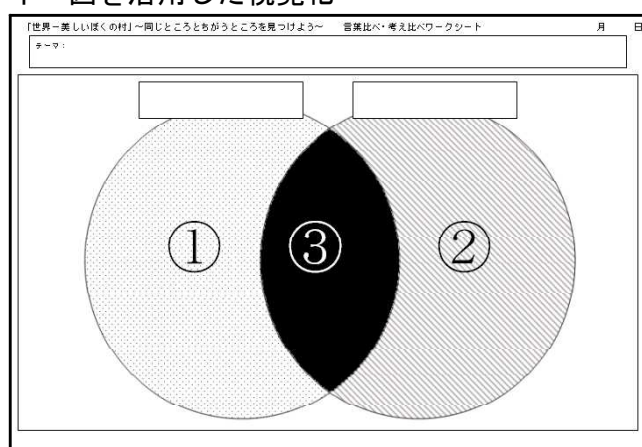


図4 図のワークシート

図4のワークシートを用いてペア交流を設定した。付箋に書いた自分の考えを番号を振った箇所に貼り分けることで、お互いの考えが共通しているのか相違しているのかを明確にすることができる。そうすることで、思考が視覚化でき、付箋に書かれた考えが相手に伝わらないようであれば、質問をしたり聞き直したりして理解できるまで交流をすることができる。毎時間のペア交流では、このワークシートを活用するようにした。

## 4 実践授業の分析・考察

### (1) 分析の方法

次の三つの方法により結果の分析・考察を行った。

- ・ 授業VTRによる交流の様子の見取り

- ・ ICレコーダーによる交流での発言内容の見取り
- ・ 毎時間ごとの児童のワークシートの記述内容の見取り

## (2) 分析・考察

### ア 交流の視点の具体化

#### (7) 「言葉比べ」から「考え比べ」への段階的な指導

A児は、実態調査のとき、自分の考えと人の考えを比較することはできなかった。自分の考えをもつことはできたが、表記上の比較や考えの比較はできていなかった。

「言葉比べ」の最初の段階では、自分の考えを伝えることができないことがあったが、4回目の交流では、はっきりと比較に対する自分の考えを述べることができた。自信をもって交流している姿が見られた。また、「考え比べ」では、質問を繰り返すうちに、ペアの考えと共通しているのではないかと考え直す姿も見られるようになった。

A児は、「言葉比べ」から「考え比べ」へと段階的に学習することで、自信をもって自分の考えが伝えられるようになり、さらに考えの比較ができるようになったことから、段階的に指導することはA児にとって有効であったと考えられる。

(図5)

また、学級全体で見ると、表記上の比較について、実態調査で約半数の児童ができていたが、「言葉比べ」の学習の後は、表記上の比較について約9割の児童できるようになった。考えの比較については、実態調査において約3割の児童ができていた。「考え比べ」の学習を行い、最初は考えについても表記上の比較しかできていなかった。どのように交流して良いのかが分かっていないと考え、交流の視点を明確にして交流すると、最終的には約75%の児童が「考え比べ」ができるようになった。また、単元後の児童の感想からも、「相手に詳しく聞いて質問して相手の考えを詳しく知った。どこの場面から考えたのか、なぜそう思ったのかなどのいろいろな質問ができた。」と述

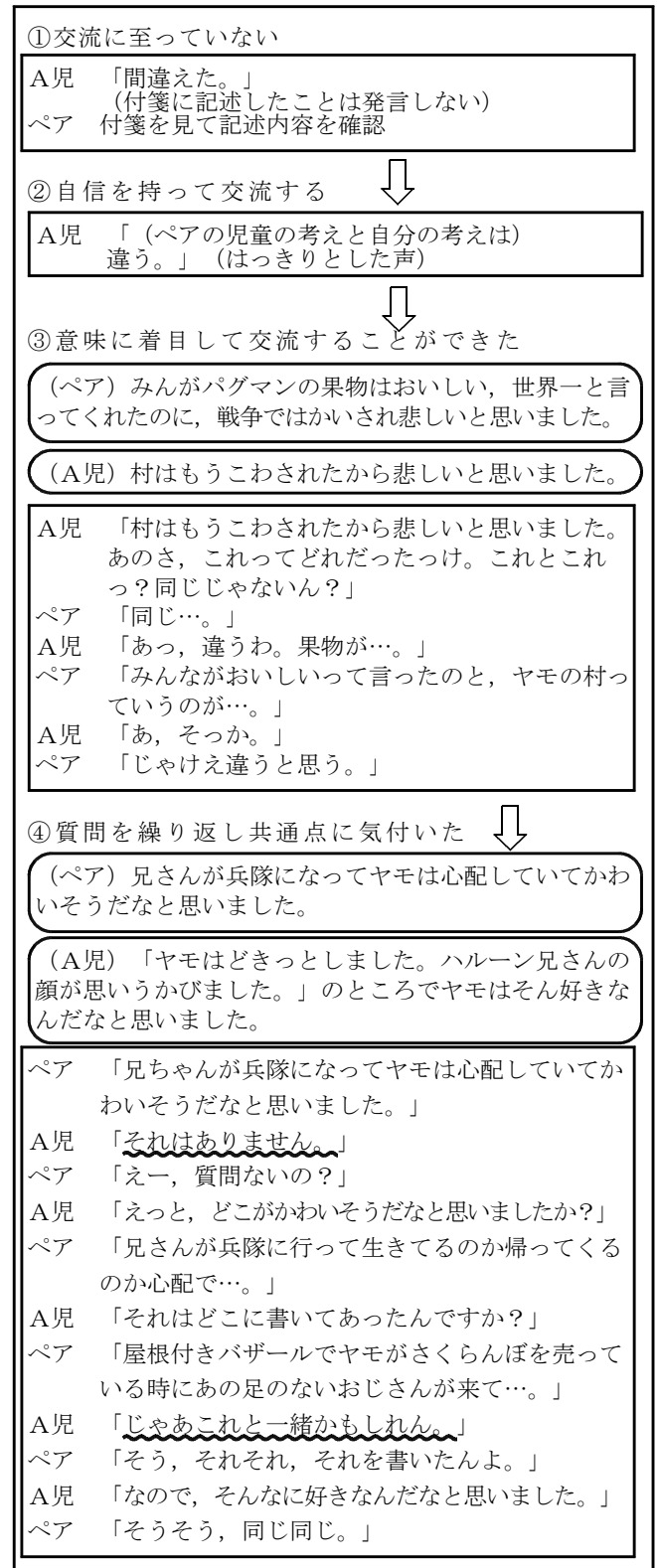


図5 A児の交流の様子

べている児童もいた。児童は、記述だけでは読み取ることができない考えまで比較することができるようになったと自覚できていた。

## (イ) 質問の文例の提示

交流の際、どのように質問すればよいのか分からなかったB児は、質問の文例を提示することと、ペアの児童にしてもらった質問により、最後には具体的にどんな質問をすればよいのか理解できるようになった。(図6)

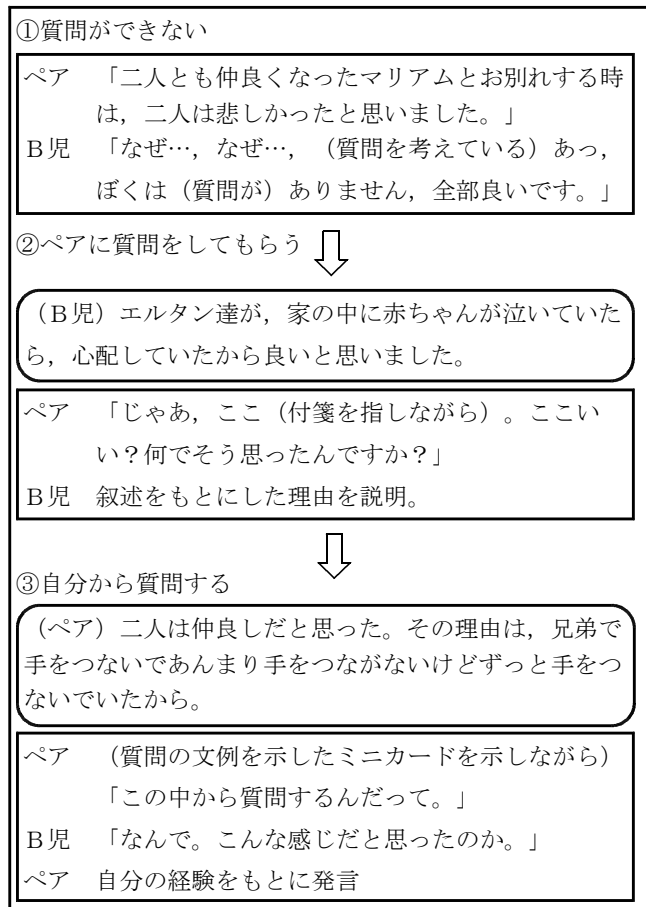


図6 B児の交流の様子

また、相手の考えを聞くだけだった児童も、質問の文例を示し、手元でも文例を見て意識できるようミニカードも配付したところ、何か質問することはないと探すようになり、交流を繰り返すうちに、質問することができるようになった。

## (ウ) 例示

質問の文例を提示するだけでは、具体的な質問の様子がイメージできなかつた児童もいた。そこで、具体的にある考えに対してどのような質問をするのか実際に質問をするという練習を行った。このことにより、相手の考えに対して質問をすることができ、付箋に書かれていない考えまで詳しく知ることができるようになった。(図7)

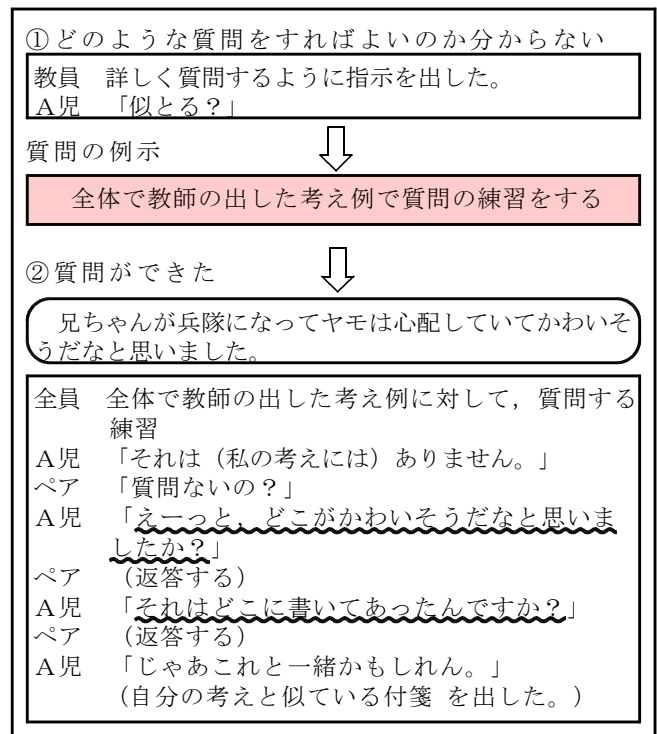


図7 A児の交流の様子

学級全体でも、前時に深く交流ができていなかった児童が、具体例で練習をした直後の交流で、記述から見えないお互いの考えを交流により引き出すことができていた。

このことから、例示は有効であったと言えるが、例示の仕方によっては、児童が具体的にイメージできないこともあると分かった。

## イ 図を活用した視覚化

集中が持続しにくいC児は、1回目の交流では、どのように交流すればよいのか分からず、ペアの児童の指示通りに付箋を貼っていた。2回目の交流からは、付箋に書いたことを共通しているのか相違しているのかを明らかにし、図のワークシートに貼ることができた。その後の学習では交流の時間は、相手の考えを知ろうと付箋に集中している様子が授業VTRから伺えた。

図を用いて学習することで、考えを見える形として示さなければならぬため、C児にとっては活動しやすかったと考える。(図8)

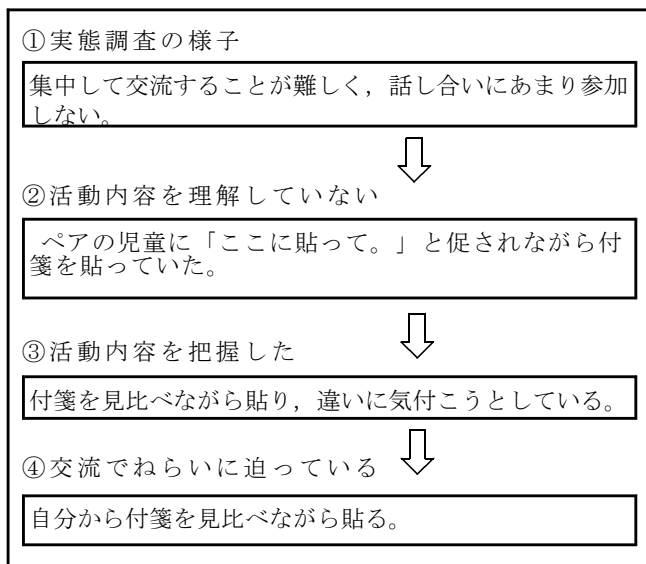


図8 C児の交流の様子

また、学級全体においても、実態調査では比較するという視点をあまりもてていなかったが、図を活用しペア交流を設定したことにより、全ての時間で全員が図に付箋を貼ることができ、互いの考えの共通点や相違点を明確にすることができていた。また、単元の始め頃の交流の様子では、付箋を見ながら話をしてしたが、交流を繰り返すうちにお互いの顔を見ながら話をするようになり、交流する時間も徐々に長くなっていった。これは、お互いの考えを深く知りたいという思いや自分の考えをしっかりと伝えたいという思いが表れていると考えられる。

## V 研究のまとめ

### 1 成果

児童の変容から交流の視点を明確にした指導の工夫が有効にはたらき、感じ方の違いに気付く力の向上につながったと考える。

交流の視点を具体化することで、教師も児童も何をどのように交流するのが明確になり、意図した交流を行うことができた。

また、図を活用し、視覚的に明確にすることで、全ての児童が、詳しく比較する姿が見られるよう

になった。ペアで一枚の図を活用することで、必然的に比較のための交流活動を行うようになった。また、共通しているのか相違しているのかを明確にすることで、交流の具体が明確になり、交流の内容が深まった。

## 2 課題

### (1) 交流の視点を具体化したものを体系的に整理する必要性

今回の研究では、「言葉比べ」から「考え比べ」への段階を設定し、授業を行った。「考え比べ」で考えを交流する際、比較できるようになるまでに、質問をとりあえずしてみるという状況から、適切な質問ができるようになり、相手の考えを深く聞くという段階をへていること分かった。このような児童の実態から、どのような手立てを行えばよいのか、体系的に整理していく必要がある。

### (2) 評価の場面と方法の工夫

今回の実践授業では、授業VTRやICレコーダーで記録していたものとワークシートで評価し、次時の授業づくりに生かすようにしたが、もっと日常的に活用できる形にしていく必要がある。

今後は、評価場面に十分時間を設定することや評価を記述内容から見取るのであれば、記述の視点を明確に示すことなど工夫改善を行っていきたいと考える。

## 参考文献

- ① 文部科学省『小学校学習指導要領 国語編』東洋館出版社、平成20年
- ② 国立教育政策研究所 教育課程研究センター『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】』教育出版、平成23年